

SESSION 2021

**AGREGATION
CONCOURS EXTERNE**

**Section : LANGUES VIVANTES ÉTRANGÈRES
LANGUE ET CULTURE JAPONAISES**

VERSION SUIVIE D'UN COMMENTAIRE GRAMMATICAL

Durée : 6 heures

Documents autorisés : Dictionnaire Kôji-en, Iwanami, 1983, et rééditions; Dictionnaire Taishûkan kango shinjiten, Taishûkan, 2001, et rééditions ou, à la place de ce dernier, Dictionnaire Shinsen kanwa jiten, Shôgakukan, 1983 et rééditions. .

L'usage de tout ouvrage de référence, de tout autre dictionnaire et de tout matériel électronique (y compris la calculatrice) est rigoureusement interdit.

Si vous repérez ce qui vous semble être une erreur d'énoncé, vous devez le signaler très lisiblement sur votre copie, en proposer la correction et poursuivre l'épreuve en conséquence. De même, si cela vous conduit à formuler une ou plusieurs hypothèses, vous devez la (ou les) mentionner explicitement.

NB : Conformément au principe d'anonymat, votre copie ne doit comporter aucun signe distinctif, tel que nom, signature, origine, etc. Si le travail qui vous est demandé consiste notamment en la rédaction d'un projet ou d'une note, vous devrez impérativement vous abstenir de la signer ou de l'identifier.

Tournez la page S.V.P.

A

INFORMATION AUX CANDIDATS

Vous trouverez ci-après les codes nécessaires vous permettant de compléter les rubriques figurant en en-tête de votre copie.

Ces codes doivent être reportés sur chacune des copies que vous remettrez.

Concours	Section/option	Epreuve	Matière
EAE	0430A	104	0330

1. Traduisez en français le texte joint (extrait de 清沢冽 『暗黒日記』) in, 桑名靖治(éd.), 『近代名作館 2 評論・随筆』文英堂出版、1998年). La légende de la photo et les notes de bas de page ne doivent pas être traduites.

2. Les particules de mise en relief paradigmatic (toritate joshi) :

- Expliquez la fonction de ces mots, leurs emplois et leurs principales valeurs.
- Illustrez vos propos en citant et analysant des exemples tirés du texte.

暗黒日記

清沢 冽



清沢 冽 二谷一福五、外交評論家。新聞記者を経て評論家として独立した。『外交史』などがある。『暗黒日記』は、一九四二から四五年にかけての日記で、一九五四年、刊行された。

一月一日(月)

昨夜から今晩にかけ三回空襲警報なる。焼夷弾を落したところもある。一晚中寝られない有様だ。僕の如きは構わず眠ってしまうが、それにしても危ない。

配給のお餅を食って、お目出とうをいうとやはり新年らしくなる。曇天。

日本国民は、今、初めて「戦争」を経験している。戦争は文化の母だとか、「百年戦争」だとかいつて戦争を讃美してきたのは長いことだった。僕が迫害されたのは「反戦主義」だという理由からであった。戦争は、そんなに遊山に行くようなものなのか。それを今、彼らは味っているのだ。だが、それでも彼らが、ほんとに戦争に懲りるかどうかは疑問だ。

結果はむしろ反対なのではないかと思う。彼らは第一、戦争は不可避なものだと考えている。第二に彼らは戦争の英雄的であることに酔う。第三に彼らに国際的知識がない。知識の欠乏は驚くべきものがある。

当分は戦争を嫌う気持ちが起こらうから、その間に正しい教育をしなくてはならぬ。それから婦人の地位をあげることも必要だ。

日本で最大の不自由は、国際問題において、相手の立場を説明することができない一事だ。日本には自分の立場しかない。この心的態度をかえる教育をしなければ、日本は断じて世界一等国となることはできぬ。総ての問題はここから出発しなくてはならぬ。

日本が、どうぞして健全に進歩するように——それが心から願望される。この国に生れ、この国に死に、子々孫々もまた同じ運命を迎えるのだ。いままでのように、蛮力が国家を偉大にするというような考え方を捨て、明智のみがこの国を救うものであることをこの国民が覚るように——。「仇討ち思想」が、国民の再起の動力になるようではこの国民に見込

一 一九四五年。

二 火炎や高熱で人や建造物を殺傷・破壊する爆弾。

みはない。

僕は、文筆的余生を、国民の考え方転換のために捧げるであろう。本年も歴史を書き続ける。幸いにして基金もできた。後世を目がけて努力しよう。

本年の予想——ドイツは本年中に敗戦するであろう。大東亜戦争は本年中に片はつくことはないであろう。ダンバートン・オークス案は成立するであろう。そうすると日本だけが、孤立奮闘するような事情が生れるであろうことも想像できる。

一月二日(火)

徳富蘇峰が『毎日』に書いている。題は「一億英雄たれ」と。

……昭和十九年の晩春であったと憶ゆ。最近死したる内閣顧問岡田氏来りて、頻りに時事を語り、余に向つて前途の見透しを問うた。余曰く「これまで我ら言論人も声を限りて叫び来つた。しかも微力にして寸効なし。この上はいずれ遠からず帝都の真中に敵の爆弾が落下するであろうから、その時を待つのはあるまい」と。彼もすこぶる悟るところあるが如く首肯した。かくて主客啜飲して相別れた。しかるに今や半ヶ年余を距ててそれが実現せられた。我らもまた皇民の一人である。敵の爆弾を歓迎すべき理由はない。しかし来るものは来た。これを好機とし、これを好潮合とし、これを一大転機として、我が一億皇民の心構えを一回転せざるは、将いずれの時を期すべきぞ。(『毎日』一月一日)

その意は日本人が覚醒しないから、「帝都の真中に敵弾を落して覚醒せしめる外はない」といった意味と解せられる。かくの如き無責任な言がであろうか。徳富は戦争開始の責任者でありながら、その罪を国民にきせているのである。かれはかつて、そういうことを書いた。

「なぐり込み」「切りこみ」というような字を、日本軍の夜襲その他に使っている。それをおつても予が書いたことがあるが、今朝の『読売』でやくざの言葉のようで嫌だと言っている。同紙によれば「焼夷弾」というのは「寇を誅する」「悪人を除く」「野蛮人を平ぐ」という意味だそうだ。

一月二十五日(木)

昨日、技術院総裁八木秀次博士、議会で答弁していった。

「最近必死必中ということがいわれるけれども、必死でなくて必中であるという兵器を生み出すことが、われわれかねがねの念願なのであるが、これが十分に活躍する前に、戦局は必死必中のあの神風特攻隊の出動を待たねばならなくなったことは、技術当局として誠に慚愧にたえず、申し訳ないことと考えている」

この答弁は、非常な感激を議場で生んだ。泣いているものもあつたという。(『読売』——非常にスペースを割いてその状況を伝う)これは、封建的な愛国観(死ぬことを高調する道徳)に対するインテリの反撥の発露だ。誰かがいつてくれたらいいと考えていたところだ。それを八木博士がいったのだ。

三 アジア太平洋戦争。当時、日本側からの呼称。
四 一九四四年の八月から九月、ワシントンの米・英・ソ・中の四大国代表会議で決まった提案。のちの国連憲章の原案。

五 八三〇—五三〇。評論家。第二次大戦中は、言論界の重鎮として、皇室中心、戦争推進の国粹主義を鼓吹した。

六 新聞記事を切り抜いて日記帳に貼つたもの。一〇〇ページも同様。

七 嘆くこと。

八 八三〇—五三〇。電気工学者。「八木—宇田アンテナ」の発明者。

九 特別攻撃隊(第二次大戦中、陸海軍が爆薬を装着した飛行機・艦艇などで敵艦船に体当たり攻撃をした部隊)の一つ。一九四四年十月、レイテ湾での攻撃が最初。

日本人は、いつて聞かせさえすれば分る国民ではないのだろうか。正しい方に自然につく素質を持っているのではなからうか。正しい方に赴くことの恐さから、官僚は耳をふさぐことばかり考えているのではなからうか。したがって言論自由が行われれば日本はよくなるのではないか。来るべき秩序においては、言論自由だけは確保しなくてはならぬ。

風邪大体よし。一日、家にて読書、そして幣原^二男の話しを筆記す。

一月三十日(火)

日本の国民は何にも知らされていない、何故に戦争になったか。戦争で損害はいくらなのか、死傷はどうなのか。これを総合的に知っている者は日本において誰もなし。一部の

官吏はある事は知っているが、他の事は知らないのである。今度の議会でも多少問題になったが相変らず駄目だ。

二月二十一日(水)

十九日に硫黄島^二に敵上陸す。いよいよ切迫した。

二月十九日の各紙は一斉に敵の対日処分案なるものを発表す。今までは全然伏せていた皇室の事——国体^三変革の企図が敵にあることをも書いている。これはかなり思い切った処置である。この反響は如何。知らまほし。一文を『東洋経済』に書く。

二 幣原喜重郎(二六三—二七三)。外交官・政治家。男爵。知米派・反軍の立場をとったが、後退した。

二 小笠原諸島火山列島の島。一九四四年二月十九日、アメリカ海兵隊が上陸。三月二三日、日本軍は玉砕(全員戦死)した。
三 國家の形態。↓補注18。